

2019年横浜ナザレン教会降誕祭礼拝
マタイ福音書 1:18～25

【聖書】

マタイ 1:18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。23「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。24ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れ、25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

1 聖書のメッセージ

神が人になることは、旧約聖書の信仰からすればありえないことです。神は創造者であり、私達人間は被造物だからです。それはここにあるコップ、私達人間が造ったコップが人間になる位ありえないこと、ファンタジーです。神と人間の間には超えられない大きな溝、断絶がある、次元がまったく異なる存在である…それが聖書の信仰でした。

しかし、神はこのあり方をご自身の手で破壊されました。ご自身で、そのあり方を変えられたのです。天の父なる神は、ご自身が最も愛する独り子、神と等しいお方であるイエスさまを、人間の赤ちゃんとして私達の中に宿らせたのです。何故でしょうか。それを、マタイ福音書のテキストからご一緒に見ていきたいと思います。

2 神はそこに来られた

今日のテキストでは、ヨセフはマリアと婚約していた…とあります。当時のユダヤ社会での「婚約」は、法律的には結婚と同じでした。しかし、同居するまでは夫婦関係を持つことは、律法で禁じられていました。ですから、婚約者のマリアが子どもを宿している事が分かったヨセフの衝撃は、容易に想像が付きまします。きっと、マリアは「天使が現れて、『聖霊の力があなたを包み、あなたは男の子を身ごもる』と告げた」とヨセフに話したことでしょう。しかし、マリアと天

使のやり取りを見た人は誰もいません。ヨセフもマリアの言葉は信じたい、しかし、人間は嘘をつく事ができます。当時は姦淫の罪、つまり現代でいう不倫は、死刑にあたる罪でした。「神が人として女の胎内に宿るなんて！マリアは嘘をついている」ヨセフはそう考えたのでしょ

う。何故なら、ヨセフは「正しい人」であったから。これは信仰に生きている人という意味があります。冒頭でもお話ししましたが、旧約聖書の信仰では、神が人になることは考えられません。ましてや神の霊が女性の胎内に子どもを宿すとは、異教的な迷信であり、到底受け入れる事はできなかったのです。しかし、マリアに対する愛情もあります。彼は悩みに悩んだに違いありません。信じたいけれども信じられない。たとえ彼が信じたとしても、周囲の人々の誰が信じるというのでしょうか。マリアは妊娠しています。じきにお腹は大きくなり、誰の目にも妊娠していることが分かるでしょう。それを見た人々は、マリアとヨセフが婚約期間中の律法を破ったと思うに違いありません。

結局、彼は非公式にマリアとの婚約を解消する道を選びました。婚約解消のあとに妊娠したのだ…と世間一般が思えば、マリアは「結婚しているのに夫以外の男性との子を身ごもった」という姦淫の罪で訴えられ死刑となることは免れるからです。

しかし、そうなればマリアは父親が誰か分からない子を宿していることとなり、そしてやがて出産します。現代でもそうですが、古代世界はシングルマザーには、考えられぬほどに過酷な時代です。マリアは社会的に抹殺されたも当然でしたし、生まれて来る子も惨めな人生を歩まざるを得ません。それはヨセフにも十分わかっていたでしょうし、心に痛みを覚えていたでしょう。

ですが、ヨセフはマリアを受け入れることができませんでした。それがヨセフの「正しさ」の限界でした。人の正しさには限界があるのです。その限界を人間は自分で打ち破ることはできません。彼の心は恐れ、怒り、悲しみ、不安、困惑に満たされ、昼も夜も彼の心は休まる暇がなかったと思います。

3 天使

そのヨセフに天使が現れて告げます。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」自分の民を罪から救う。それはどういう意味でしょうか。私達人間の罪とはどういうものなのでしょうか。

アメリカの公民権運動の指導者マーティン・ルーサー・キング牧師はこう言っています。「誰かを徹底的に見下す事なしに生きるのは、人にとってなんと難しいことか。そうしないと憎しみを向ける対象を不当に奪われたような気になるだけでなく、自分の嫌な所を見つめざるをえなくなる。」ここに集められた私

達みな、光と闇がないまぜになった存在であることは明らかです。誰一人として闇がない…というような人はいないでしょう。私達はみな、偽善や虚偽をまとうことがあります。私達はみな、他人よりも自分のほうがましな存在であることを証明したい、そして尊敬されたい、という願う思いを感じたことがあるはずです。私達はみな、自分に不都合な人に対して、「あんな人、いなくなればいいのに」と思うことがある筈です。クリスチャンでさえ例外ではありません。どんなに高貴な生まれだと言われる人であってもそうです。闇を抱えていない人間などいません。そして、内側に闇を抱えている私達は、神が造られた全ての命をあるがままに喜べなくなっています。ヨセフもそうでした。マリアのお腹の中の子供の命も、マリアの命も、そして自分も喜べなくなっていたのです。

4 圧倒されたヨセフ

しかし、そのヨセフが変えられました。天使が告げた神の愛によって変えられました。天地万物を創造された唯一の神、全知全能のお方、永遠の方、人間とはまるで異なる方が、ご自身のあり方を自ら破壊し、人間になってくださるとは！それほどまでに人間を愛し、罪から救い、神から与えられた命をどんな状況でも、ありのままに心から喜びあえるように…と神はその独り子を私達にお送りくださったのです。神は人間のためにありえないことをなされた。「なんという事か、なんという事か」ヨセフは叫んだのではないのでしょうか。神の愛に圧倒されたから。神の愛に古いヨセフ、人間の正しさにしがみ付く古いヨセフは洗い流され、妙なる神の愛を喜ぶヨセフへと造り変えられたのです。

5 ある女性

この時のヨセフを思う時、私はある牧師の体験談を思い出します。ある晩、教会を訪ねてきた信徒の女性が、牧師の前で泣き崩れ、「あの子を産まなければよかった」と呻き声をあげたそうです。その女性の子供さんは、精神障害をもっていました。私達が造り出したこの社会は、障害をもっている方々が決して生きやすい社会ではありません。いえ、そんな生易しいものではない。命にランクづけをする社会。優秀な命、生産性の高い人、発展に役立つ命はよい命であり、そうでないように人間が考える命はいらない命…と、人間が人間の命をランク付けする社会です。そのような社会に出ていき、ことあるごとに差別されたり無視されたりする事に傷ついたその人の子どもは、傷つけられた辛さを吐き出すように、母親に向かって罵詈雑言を浴びせかけていました。「どうして私を産んだんだ、生むんだったらちゃんと産めよ！神様なんているわけないだろ！いたらどうしてこんなに辛い目に遭うんだよ！」と。その夜も「私も

あの子も生まれて来なければよかったのだ」キリスト者の彼女がそう呻かざるを得ない辛いことがあったのだと察することができました。

何を言っても気休めにしかならない。その牧師は、母親と一緒に礼拝堂に座り、十字架の前でただただ「主イエスよ、私達を憐れんでください」と祈り続けたそうです。この「憐れんでください」の「憐れみ」、聖書の「憐れみ」は上から目線の憐憫の情ではありません。の人の痛みを自分の腸がよじれるような痛みとする事からくる言葉です。その人の悲しみを自分の悲しみとし、その人の苦しみを自分の苦しみとする、そんな共感が基本にある言葉です。苦しみ悩み悲しむ人と徹底的によりそう事を、神様に願い求め、祈ったのです。それは先ほど和田さんが特別讚美して下さった「PieJues」の歌詞のようです。

私達は誰もが生きる上で悲しみや痛みを知っています。生きる上で悲しみや痛み、苦しみは避けることができません。しかし、共に痛み悲しんでくださる主イエスに向かい、確かな信頼をもって「私の悲しみをわかってください」と祈ることができることは、本当に幸せな事です。

何故なら、そう心をこめて祈る時、主の愛が分かるからです。この牧師もそうでした。母親と共に、十字架の前にうなだれて「ただ憐れんでください」と祈り続けた時、彼の心に、主イエスの深い深い悲しみがなだれ込んできたそうです。この社会で疎かにされ傷つき悲しんでいる親子を、いかに深く主イエスが愛しておられるか、生まれてこなければよかったと叫び悲しむ親子以上に、主イエスが私達人間が作り上げている罪の社会を悲しんでおられることがわかりました。「私が愛する彼女達がどうしてこのように自分の命を否定せねばならないのか、それが何より何よりも悲しい辛い。だが、社会がどう言おうと、人間がどう考えようと、あなたがどう否定しようとも、あなたは私の目には限りなく尊い！」、主イエスがそうおっしゃっている事を、牧師は確信したそうです。だから、牧師は、主イエスが今母親と共にいて、今も共に試練を耐えてくださっていることを語りました。主は試練をなくすようなやり方で私どもと共にいてはくれません。しかし、主は私達が試練の中であって、父なる神の方向を向けない時に、自分の命を悲しみ嘆くような時に、私達の代わりに命の造り主、父なる神に叫びをあげ、祈ってくださる、共に試練を耐え、私達の重荷を担い、父なる神を示してくださる。そうして私達が神の愛を分かるようにして下さり、よい者へと造りかえてくださる、そのことを牧師は母親に静かに語ったそうです。母親は礼拝堂を去っていましたが、その時の顔は実に静かな喜びにあふれていたそうです。

この牧師は、悲しむ弱い母親と共にいることで、主イエスと新たに出会い、慰めの言葉を頂いたのだと思います。私達、教会に仕える牧師は、このように、弱い方々、困っている方々と共に寄り添い、共に神に憐れみを祈ることで、不思議なことですが、神の恵みの大きさを経験することがあります。状況が変わ

るわけではありません。自分が変えられるのです。それは神をより深く知るために得がたい経験です。

「自分の民を罪から救うからである。」と言われた神の御子は、神の御子でありながら、まだ十代の半ばに過ぎぬ年若い女性の所にやってきました。それも社会的に抹殺されるしかないような父親のわからぬ子として生まれてきてくださったのです。そうすることで、神様はマリアに、そしてヨセフにご自身の人間への深い愛を示しました。弱く小さい者を愛する憐れみ、自身が弱く小さくなる愛を示され、マリアを、ヨセフを変えたのです。そしてそれは私達にも起こることです。

6 系図

それは、「自分の民を罪から救うからである。」と天使が言ったことからわかります。この「自分の民」とは誰のことでしょうか。マタイ福音書の1章1節から17節までは系図、イエス・キリストの系図が描かれています。聖書をあけてご覧ください。イエス・キリストの先祖の名前が連なっています。通常、系図というのは、古代から支配者、王たちを権威づけるために造られてきました。やんごとなき身分の人々の系図はやんごとなき人しかでてきません。権力者は自分に不都合なことは載せません。

しかし、このイエス・キリストの「系図」には、実に様々な人が出てきます。通常、系図は男性だけの名で続けられるものですが、ここにはタマル、ラハブ、ルツという女性の名が記されており、「ウリヤの妻」と記される女性もいます。そして、最後に、マリアが出てきます。彼女だけ「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生れになった」と記されています。

ここに出てくる女性たちは、決して世の支配者の権威づけに好都合な清廉潔白な女性たちではありません。舅との子どもを身ごもったタマル、なんと遊女であるラハブ、そして「ウリヤの妻」とは、ウリヤという夫がいながら、有名なダビデ王と関係した女性。更に、この系図に出て来る女性はマリアを除いてみな外国人です。「神の民」を自負していたユダヤの人々からすれば、「神に見捨てられた人たち」—寧ろ、世の規範から外れたアウトサイダーな人たちがイエス・キリストの系図には見られるのです。勿論、アブラハムやイサク、ヤコブなど、神の民の本流と言われる人たちもしっかりと系図には記されています。しかし、そうでない人たち、宗教的権威からすればちっぽけで弱い人々をもれなく記されています。ですから、このような系図の先に生まれた主イエスというのは、「全ての民の王」ということになります。私達人間は、性別、富、社会的地位、出身、家柄、国籍、民族、宗教、様々な条件でカテゴライズし区別しようしますが、神は人間を区別なさいません。いえむしろ、私達人間が弱く

小さくした人々をこそ、深く愛してください。主イエスは成長して神の国を宣べ伝えていた頃、最後の審判について語る時、弟子たちにこのように仰いました。「あなたがたが飢えている者に食べさせ、喉が渴いている者に飲ませ、宿のない旅行者に宿を貸し、裸でいる者に服を着せる時、それは私にしてくれたことだ。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのだ。」苦難の中にある方、弱く小さく悲しんでおられる方、そこには主イエスが共におられます。

7 誰も行かなければ私達が行こう

主イエスのいる所、主イエスに愛され、主イエスを愛する者たちもいます。そんな一人に中村哲医師がいます。彼は1980年代からパキスタンやアフガニスタンでの僻地医療に取り組む医師でしたが、いくら治療しても栄養失調でまたやってくる子供達を見て、まずきちんと食べることが大切、食料を生産できる環境が大切だと一念発起し、現地の人々と協力して大規模な灌漑設備をつくり、荒れ野を緑に変えてアフガニスタンの数十万の農民の生活を支える基盤を造った方です。そして、12/4 現地で殺害されました。彼はキリスト者です。中村医師が代表をつとめるNPO「ペンシャール会」の合言葉は、「誰もいかぬなら、我々が行こう」だそうです。

この言葉は、まさにイエス・キリストそのものです。聖なる者は誰もいくような所ではなかった、自己中心的な罪の闇に沈んだ人間世界など。しかし、父なる神の御心に従い主イエスは来てくださった、自分のあり方を大きく変えて、弱く小さい人間の赤ちゃんとして。人の罪によって傷つき、さらに自分の罪で人を傷つけてしまう私達に、神に造られて愛されてある命であることを示すために、その身を十字架に捧げてくださいました。私達が主イエスと共に十字架につき、古い自分に死に、そして主イエスと共に新しい命に生まれ変わるために。神のみ前に弱く小さい者として、神に支えられ、導かれて生きる一人一人となるために、主はこの地へと降りてきてくださったのです。

キリスト者である中村医師も、主イエスに倣い、誰も行きたがらないアフガニスタンやパキスタンの荒野に向かい、干拓設備を造ったのでしょう。そこに弱く小さい方々、苦しむ一人一人がいたから、イエス・キリストがおられるからです。それは私達、横浜ナザレン教会も同じです。私達はアフガニスタンやパキスタンに出かける事はしません。しかし、この横浜ナザレン教会に神が集めてくださったお一人お一人の悲しみや苦しみ、悩みに、寄り添う教会でありたいと思います。誰もいかない命の現場に、涙の谷に出かけて行く、そしてそこで一緒に主イエスを見上げて祈りたい、神がどれほど一人一人を愛しているか伝えたい、主イエスと神を愛して共に生きる命の喜びを伝えたい…マリアに寄り添い支えたヨセフのように、アフガンの人々に寄り添い助けた中村哲医師のよう

に、主イエスと共にある横浜ナザレン教会を共に目指していきたい…そのように切に願います。